



幻の男子部 ～宝塚BOYS～

宮部 真砂子

♪今はもう秋々すみれの花の季節ではありませんが、「女の園」として有名な宝塚歌劇団に戦後の一時期だけ「男子部」が存在した、という事実をご存じてでしょうか？

◆創設者小林二三(いちぞう)の夢

宝塚少女歌劇(現宝塚歌劇団)は現在の阪急電鉄の前身、箕面有馬電軌の経営者(当時は専務)小林二三(1873～1957)が三越の少年音楽隊からヒントを得て発案し、大正2年に設立された。当時箕面有馬電軌は集客事業として宝塚新温泉をオープンし、そこでの集客イベント「婚礼博覧会」の余興として出発したのが宝塚少女歌劇であった。

小林は宝塚唱歌隊、宝塚少女歌劇養成会を経て創立された宝塚音楽歌劇学校(1918年)の初代校長にもなった。多忙を極める日常のなかで彼が刊行した著作の一つ、雑誌『歌劇』掲載『おもひつ記』の目次を見ると「男性加入」という単語が何度か登場する。小林はかねてから「歌舞伎とは違う新しい演劇を日本国民のための国民演劇としてつくらなければいけない」という使命感に燃えていた。「男女合同による本格的な国民劇」を意図していた彼にとって「男性を加入させる」という事は長年の構想でもあった。

◆男子部誕生、そして解散

本書冒頭に、後に第1期生メンバーとなる人物が1945(昭和20)年秋、一面識もない小林に宛てた手紙のエピソードが登場する。小林がこの手紙によって男性加入を思いついたとは考えにくいのが、男子部が生まれるきっかけを作った可能性はあるだろう。宝塚歌劇団男子部は創設者、小林の発案で1945年12月に一期生5人が入団して誕生した。

その後、54年に解散するまで計25人が在籍した。女子生徒達からは、冷ややかな視線を受けながらも「男生(だんせい)ちゃん」と呼ばれた。彼らは女性と同様に芸名を名乗り、声楽や日舞、バレエ、演劇の稽古に懸命に励んだ。しかし、与えられるのはいつも、客席から見えない舞台袖で歌う「陰コーラス」や、時には馬の脚に入ったたり、舞台装置の操作などの裏方ばかりであった。

また「タカラヅカは女の園」「宝塚の舞台に男は似合わない」という歌劇団内の異論、ファンの抗議も激しく、ついにメインステージである宝塚大劇場の舞台に俳優として一度も立つことなく、男子部は昭和54年3月に解散する。この顛末は本書に詳しい。

◆清く正しく美しく…

さて、男子部解散後の彼らはどのような人生を送ったのだろうか。本書では本人や残された家族、当時の関係者たちの証言を取材している。彼らが選んだ職業は舞台俳優、会社員、ダンサー、教員、演奏家…と実に様々であった。元ツカガールを妻にした人もいた。また、家族以外には自らの過去を「黙して語らず」という人もいた。

昨年、創立百周年を迎え話題となった宝塚歌劇団。今や世界でも数少ない「女性だけのレビュー劇団」として日本だけでなく、世界に知られる存在に成長した。確かに「清く正しく美しく」という宝塚の伝統イメージには、男性は似合わなかったかもしれない。歌劇団を裏で支えた男子部が宝塚の正史に登場することは、これからもないだろう。しかし、宝塚歌劇団の栄光の歴史の陰に、見果てぬ夢の実現をひたすら追い求めた、こんな男たちがいた事を心にとどめておきたいと思うのである。

参考文献(図書)

- ◆『おもひつ記』小林二三 2008 阪急「ミュニケーションズ」請求記号●J13-666
- ◆『宝塚歌劇の変容と日本近代』渡辺裕 1999 新書館 請求記号●G4-259
- ◆『タカラヅカという夢』津金澤聰(廣)ほか 2014 青林社 請求記号●J126-827

●みやへ まさこ 本書を元にした演劇とコミックが存在する事を今回、はじめて知った。タイトルとともに【宝塚BOYS】である。